

熊退教協結成 五十周年記念

(特別号)

熊退教協

(熊本県退職教職員等連絡協議会)

発行所

熊本市中央区九品寺1丁目11-4
熊本県退職教職員等協議会

(代)372-1500

編集者発行人
松田道雄

印刷
コロニー印刷

☎353-1291(代)

No. 110

50年のあゆみ

過去に学び、明日へつなぐ

一九七四年に創設された熊退教協は本年(二〇二四年)、結成五十周年を迎えます。そこで熊退教協ニュースは今回、次のような思いのもと『五十周年記念特別号』として発行いたします。

*結成の原点を振り返るとともに、五十年間におよぶ先達の取り組みに学ぶ。
*熊退教協が大事にしてきたことを確かめ合いながら、「思いのバトン」をつなぐ。



熊本県教育会館

50周年を迎えて

熊退教協会長 松田道雄



熊退教協結成50周年にあたり、退教協活動を担ってこられた諸先輩方、そして運動にご理解・ご支持いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。

さて、1974年の熊退教協結成当時と比べ、この50年間で政治、経済、社会の状況は激変しています。

政府自民党は、憲法九条改悪をもくろみ、ロシアのウクライナへの武力侵略や台湾問題を巡る中国脅威論等を持ち出し、安保3文書改訂、防衛費増額など、戦争ができる普通の国づくりが進んでいます。

環境問題では福島第一原発の「汚染水」排出が強行され、沖縄辺野古埋め立て有効の最高裁判決が示されました。

経済の面では、日銀の長期にわたるゼロ金利政策が物価高を招いています。賃金上昇が物価上昇に追いつきません。私たち年金生活者にとってはさらに厳しい状況があります。

一方、学校教育を巡る最近の情勢は長時間労働に苦しめられ、教員不足・希望者減に歯止めがかかりません。非正規職員も含めた労働条件改善が、問題解決のためにも必要です。

私たち退職者も、現職と協力し、教育を巡る諸課題を解決していく必要があります。

最後に、記念誌作成に携わられた皆様に感謝し、50年記念誌が多くの関係者に読まれ、運動の参考になることを期待します。

ひばりつばきたん思いや願ひ① 早田豊一さんへインタビュー

五十年前、熊退教協はどのような思いで創られたか。力を入れて取り組んできたことは……。長いあいだ会長や顧問として運動を推進してこられた早田豊一さんにお聞きします。

創設時の思いや結成式などについて伺います。

現職のときは「教え子を再び戦場に送らない」のスローガンのもと、組合活動をしてきました。退職しても信念を貫き、スクラムを組んで頑張ろうとの思いで退教協を結成しました。退職しても、楽しようとは思わなかったですね。

また、現職の人たちをバックアップしていこうとの思いも含めて創りました。結成式は、一九七四年二月九日、熊本市京町にあった旧教育会館で行われました。皆、燃える思いで集まってこられました。

退職後の生活保障への取り組みは?

退職したら年金収入が中心です。また、病気・ケガに備えて医療や介護のことも大事になってきます。

そこで福祉・社会保障の中でも、特に「年金・医療・介護」の充実に向けて取り組んできました。具体的には、署名活動・ハガキ書き・学習会や集会の開催・交渉などいろいろやってきました。

こうした生活保障関係は個人で言っても実現できません。みんなの思いを束ねていくことで、大きな力になります。退教協を創った理由のひとつは、このことにあります。

教科書問題へも取り組んでこられたそうですね。

あの戦争を賛美し支えていたのが国定教科書です。戦地に行つて人を殺すのが一番と。人権とか生命尊重とかと真逆でした。同じような過ちを繰り返さないため、教科書展示会に行く取り組みも退教協で呼びかけました。

これからの退教協に期待されることは?

私たちは地域の老人会と違って、現職の頃から平和の大切さ、人権の大事さ、そして福祉のことについて学習してきました。これらのことについては特に敏感で、退職しても体に染みついていきます。これからも、これらを信条として頑張っていってほしいですね。



早田豊一顧問

退職された方への メッセージ

これまでも、そして、これからも

「退教協って?」「退職してもまた(まだ)組合?!」なんて思っているあなたへ。

現職の頃、退教協のみなさんを見るたびに「元気のよかねえ」とか「若つかねえ」なんて思っていました。「高年期」どころか、まさに「光年期」そのもの、いまを輝かせて生きる姿が眩しく映りました。そこには何ものにも縛られない自由への憧れがありました。

わたしたちは、これまで労働運動や教研活動に真摯に向き合ってきました。これは、いのちを守り、くらしを豊かにする営みであったし、たくさんの人の幸せづくりとなかまづくりにつながりました。退職するということは、収入が無くなり、貯蓄が減少し、社会的な存在感が薄れていくことでもあります。だからこそ確かななかまの存在としての「誰か」が必要とされます。退教協は、親睦と交流を軸にサロンのな雰囲気大切にしながら、みなさんがつくる集まりです。人は、誰かに必要とされることで自己有用感や自己肯定感が高まります。元気になるのです。若返るのです。そして、「若い」

もまた人間的な発達という捉え直しもできます。一病息災どころか、いまは二病息災、三病息災の時代になりました。これからは「老い」や「病」と、しなやかに、したたかに、しぶとくつき合っていきたいと思っています。

最後になりますが、「さんでーまいにち」だけど、「今日行くところがあつた」ことや「今日用事がある」ことは大切ですよ。つまり「きょういく」や「きょうよう」は、退職しても大切になるのです。わたし自身の「これまで」をふり返ってみても、出会いと学びの連続でした。それは、「これから」もきつと、いま、そんな予感がしています。

さあ、みなさん、ぜひ退教協に集いましょう。心からお待ちしています。